

『幻坂』用語解説（2016年5月7日用）

- 1：上町台地

大阪市内を南北に走る台地。和泉山脈の北に和泉から南河内にかけて広がる河泉丘陵・泉北台地に続く台地で、大和川より北に向かって幅二―三キロ、長さ一―二キロにわたって岬状に突出し、大阪平野を大阪海岸低地と河内低地に二分する。北端には大阪城が位置する。台地の高度は北部が高く標高二五メートルに達するが、南へ行くにしたがって高度を漸減させ一〇メートルほどになる。台地西端は直線状の急崖をなし、安国寺坂（東区）、真言坂・愛染坂・源聖寺坂・口縄坂（天王寺区）などの坂道や幾つかの清水湧出地があるが、台地東側は旧猫間川の谷から桃ヶ池（阿倍野区）・長池（東住吉区）にかけての凹地と百済野（天王寺区）・我孫子（住吉区）の台地からしだいに高度を減じて西除川・平野川沿いの河内低地へ移行する。（『日本歴史地名大系』より抜粋）

- 2：勝鬘院（天王寺区夕陽丘町）

四天王寺北西、愛染坂（勝鬘坂）を登りつめたところにある同寺別院で、和宗、**本尊愛染明王**。俗に**愛染さん**の称で親しまれる。沿革は明らかでなく、「天王寺誌」によると四天王寺四ヵ院の一つ施薬院がかつて当所にあったという。また聖徳太子の勝鬘経講讃の旧跡と伝える（四天王寺名跡集）。毎年六月三〇日―七月二日（もと六月一日）に**愛染明王の開扉**があり、**愛染祭**と称して多くの参詣者で賑う。大坂夏祭のさきがけで、「氷の朔日」といってこの日には氷を食べる習わしがあった。勝鬘院と大江神社の南側、上町台地西側の傾斜を夕陽丘町から下寺町二丁目へ、比高約一二メートルの坂道が通じている。この坂は愛染坂あるいは勝鬘坂と称され、江戸時代には愛染参りや毘沙門信仰の善男・善女で賑い、坂の両側に遊所があった。（『日本歴史地名大系』より抜粋）

- 3：愛染明王

真言密教の神。愛欲を本体とする愛の神。全身赤色で、三目、六臂、頭に獅子の冠をつけ、**顔には常に怒りの相を表す**。近世では、恋愛を助け、遊女を守る神としても信仰された。また、俗に、この明王を信仰すると美貌になると信じられていた。（『例文 仏教語大辞典』より抜粋）

- 4：西寺町（天王寺区下寺町一―二丁目）

生国魂神社の西方の南北方向の道に西面し、生玉西寺町とも下寺町ともいう（宝暦二年の天王寺管内地図）。二四寺からなり、すべて浄土宗。「蓮門精舎旧詞」によると、天正一九年（一五九一）に大覚寺、天正年中に源聖寺・善福寺、慶長九年（一六〇四）に宗念寺、慶長年中に大蓮寺・称念寺・西往寺・宗慶寺・善龍寺・称名寺・法界寺・正覚寺・幸念寺がそれぞれ開基し、南北に延びる寺町街区が成立。源聖寺の南、谷町筋（旧生玉寺町筋）から西へ下る坂を源聖寺坂という。石畳の坂道で途中に源九郎稻荷が祀られている。織田作之助の「夫婦善哉」の舞台で有名になった。（『日本歴史地名大系』より抜粋）

- 5：ゴシック小説

イギリスの18世紀後半から19世紀初めにかけて流行した一群の小説。恐怖小説ともいう。中世のゴシック風の屋敷、城、寺院、修道院などを背景に超自然的怪奇性を主題とする。創始者はホレス・ウォルポールで、『オトラントの城』（1764）はこの種の小説の原型をなす。初期アメリカ小説は、E・A・ポー、N・ホーソンらをはじめゴシック小説と密接な関係にある。（『日本大百科全書』より抜粋）

- 6：口縄坂

上町台地西斜面の坂道の一つで、四天王寺の北西にある太平寺の南側付近から西へ下り、善龍寺・称名（寺の間を通過して、南北に延びる下寺町に連絡。「摂陽群談」「摂津名所図会大成」は蛇坂の文字をあて、坂名は道が蛇のように曲がることによるものと推測。また当地付近は大坂城築城の際の縄打口（起点）であったとの伝承があり、一説には、坂名はこれにちなむという説もある。現在は石畳の坂道で両側には老木が茂り、付近は大阪市中でも古い面影を最もよく残している。（『日本歴史地名大系』より抜粋）

- 7：織田作之助（1913～1947）

小説家。大阪生まれ。「夫婦善哉」で世評を得たが、時局のため歴史小説に転じる。第二次大戦後は「世相」「土曜夫人」などを発表し、「織田作」の愛称でデカダンス作家として知られた。（『日本国語大辞典』より抜粋）42年から一連の歴史小説や清楚（せいそ）な名作『木の都』（1944）などが発表された。（『日本大百科全書』より抜粋）

- 8：生國魂神社（天王寺区生玉町）

四天王寺の北西、地下鉄谷町たにまち九丁目駅の南西にあり、通称は「いくたま」神社で、「生玉」とも書く。生島神・足島神を主神とし、相殿に大物主神を配祀。神社から北へ下る道を真言坂というのは、この道の西に南坊・医王院・観音院、東に遍照院・新蔵院・桜本坊の真言宗の寺坊があったからである。境内社には皇大神宮・城方向きたむき八幡宮・輔神社・家造祖神社・稻荷神社・住吉神社・天満宮・鳴野神社・浄瑠璃神社の九社がある。例祭日は九月九日。七月一日・一二日は夏祭。八月一日・一二日には「大阪薪能」が境内で開催される。（『日本歴史地名大系』より抜粋）

- 9：松尾芭蕉（1644～1694）

江戸時代前期の俳諧師。俳号は、はじめ宗房という名乗りを音読して用いたが、江戸に下って桃青と号した。別号は、立机後に坐興庵・栩々斎（くくさい）・花桃夭・華桃園など、深川退隠後に泊船堂・芭蕉翁・芭蕉庵・風羅坊など。景情融合の理想が現実には景に情を託そうとはかる作為的な句作りに堕ちやすいのを懸念し、そうした私意が介入する余地のないまでに情の表出を抑え、日常の景を淡々と描き出す作風を「かるみ」と称して、彼ら新人に唱導したのである。「かるみ」の代表撰集とされる『炭俵』はその野坡グループの共編、『続猿蓑』は沾圃の企画を芭蕉が生前に精撰し、没後に各務支考が加修して刊行したものである。この江戸新風を上方にも及ぼすため、同七年五月最後の旅に出たが、すでに健康すぐれず、九月大坂蕉門の確執をとりもつために伊賀から足を運び、ついにこの地で倒れ、門弟たちに看取られながら十月十二日息をひきとった。（『国史大辞典』より抜粋）

- 10：洒堂＝浜田洒堂（？～1737）

江戸時代前期-中期の俳人。医師で松尾芭蕉の門人。元禄3年(1690)俳諧撰集「ひさご」の編者となり、6年江戸深川の芭蕉庵滞在を記念して「深川」を刊行。同年夏、大坂にうつって点者となり7年「市の庵」を刊行したが、俳壇経営には失敗。晩年の芭蕉から遠ざかった。元文2年9月13日死去。近江（滋賀県）出身。名は道夕。別号に珍碩(夕)。（『日本人名辞典』より抜粋）

- 11：之道＝槐本之道（1659?～1708）

江戸時代前期の俳人。万治2年?生まれ。薬種商をいとなみ、大坂では初の松尾芭蕉の門人。元禄7年発病した芭蕉を弟子の榎並舎羅らとともに、その死までみとった。宝永5年1月4/5日死去。50歳?通称は伏見屋久右(左)衛門。別号に東湖、諷竹など。姓は「えのもと」ともよむ。編著に「あめ子」「淡路島」「砂川」。（『日本人名大辞典』より抜粋）

- 12：支考＝各務支考（1665～1731）

江戸中期の俳人。各務氏。別号東華坊、野盤子、見竜、獅子庵、変名蓮二坊など。美濃（みの）国（岐阜県）の人。幼時、郷里の禅寺に入ったが、19歳で下山して遊歴、1690年（元禄3）26歳のとき近江で芭蕉に入門、その博学多才を愛されて晩年の芭蕉に随侍した。師の没後は、地元美濃を本拠に北越や九州方面に至るまで広く行脚を重ねて、蕉風俳諧の伝播に貢献すること大であったが、1711年（正徳1）には死亡したと偽って自己の「終焉記」を出すなど、世人の反感・誤解を買うことも多かった。（『日本大百科全書』より抜粋）

13：井原西鶴（1642～1693）

江戸時代前期の俳諧師、浮世草子作者。本名平山藤五。西鶴自身の記すところによれば、明暦二年（一六五六）十五歳のころ俳諧を学び、寛文二年（一六六二）二十一歳の時には早くも点者として独立したという。西鶴は発句よりもむしろ連句を得意とし、軽口すなわち速吟を誇っていたが、延宝三年三十四歳の時、同年二十五歳にして没した妻の追善に興行した『俳諧独吟一日千句』にその最初のあらわれをみる。そして同五年三十六歳の五月二十五日には、生玉の本覚寺において一夜一日千六百句独吟を興行し、『西鶴俳諧大句数』と名づけて公刊した。これが矢数俳諧の最初である。矢数俳諧とは、京都三十三間堂において行われる大矢数に倣ったもので、通し矢の最高記録保持者が天下一の名誉を許されるのと同様、俳諧における速吟日本一をねらったものであった。ところが西鶴の記録は、大和の月松軒紀子の千八百句（延宝五年九月興行）、仙台の大淀三千風の三千句（延宝七年三月興行）独吟成就によって破られたので、西鶴は再度記録の更新を志して、延宝八年五月七日生玉寺内において四千句独吟に成功した。四千翁の別号はこれに由来する。時も時、天和二年（一六八二）三月師の宗因が没した。宗因の死去と同時に貞門と対抗論戦に優勢を示していた談林一派の活躍が急に衰えて来る。その間の事情は今日なお明らかでないものがあるが、俳壇の形勢はいわゆる天和調から芭蕉の新風へ移りつつあったのである。そこで西鶴は最後の試みとして、貞享元年（一六八四）六月五日摂津住吉神社において二万三千五百句独吟の矢数俳諧を興行するのであるが、その発句「神力誠を以息の根留る大矢数」は、談林の頹勢をこの一挙に挽回せんという祈願の意とも、西鶴自身の俳諧への袂別の意ともいずれにも考えられる。（『国史大辞典』より抜粋）

14：西行（1118～1190）

平安時代後期の遁世者、歌人。俗名を藤原義清という。建久元年（一一九〇）二月十六日入寂した。七十三歳。弘川寺境内に墓がある。かつて「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」と詠んだとおりの最期として、藤原俊成・慈円・藤原定家・同良経などの感嘆するところとなった。元久二年（一二〇五）撰進の『新古今和歌集』には、後鳥羽上皇の敬慕によって九十四首採られ、巻軸にもその作が置かれた。これらにより、歌道と仏道の両面から名声が高まり、『西行物語』『撰集抄』などの伝説化が進んだ。その影響の広さ深さは、『とはずがたり』の著者後深草院二条、連歌師の宗祇・宗長、俳諧師の松尾芭蕉、歌僧似雲ら、中世・近世の文学者をはじめ、全国に流布する西行伝説によって知られる。（『国史大辞典』より抜粋）